

現代連句の音数律

七七の結句の分節

まつもと ひろたけ

大岡信・岡野弘彦・丸谷オ一共著2008『歌仙の愉しみ』（岩波新書）は、俳句はしっているが連句のことは知らないという読者がよんでもきっとおもしろい一冊である。そのおもしろさを紹介するのは別稿にまわすとして、今回はそこにかかげられた歌仙の実際から、音数律の問題をとりあげる。具体的にいえば、575の発句からはじまって、それに77の短句をつける、この順をくりかえして「挙句（あげく）」までのワクでおわるながれにあらわれる、77の短句をめぐる形式上のことである。それも77のうちのうちろの7音（7拍）、結句の部分の分割に関して問題にする。

『歌仙の愉しみ』の「大注連の巻」初折の裏に玩亭（丸谷）乙三（岡野）信（大岡）三先生のつぎのような「付合」がある。ヨコがきのため表記をかえた箇所がある。

何正宗口説な ^{くぜつ} かばに持出して	玩
愛想づかしをさらりと ^{かは} 躰し	乙
見はるかす遠山の ^へ 辺にとんびの輪	信
生揚おろし合性よろし	玩
秋鯖の肌あをあを ^{なすび} としまりくる	乙
ひと露ごとに色増す茄子	信

うへの短句77のうちろの7音部分は、岡野、丸谷、大岡三人とも、どういうわけか「さらりと | かわし」「あいしょう | よろし」「いろます | なすび」のように4 - 3ときれなくみたてになっている。よみながら、まずこの4 - 3調が目にはいった。それが短句に三度つづいているのもめずらしいが、以下ではこの7音部分のきれかた、きりかたを、まず、芭蕉の時代からみておきたい。

蕉風連句の結句の音のきりかたがどうなっていたかを、とりあえず『芭蕉七部集』から、とりだしてみる。結句の七音（七拍）のきりかたからいうと、1 - 6、2 - 5、3 - 4と、その逆順の6 - 1、5 - 2、4 - 3がある。このほかにきれめない7 - 0（0 - 7でもおなじである）がかんがえられる。なお、ここでいうきりかたとは、まず第一に、句中ではたらく名詞、動詞など独立できる単語へのきりかたということで、いわゆる「品詞分解」ではない。

まず、1 - 6あるいは6 - 1というきりかたの句はないようである。

2 - 5ときれぬ例からあげる。以下歌仙の名や作者名はすべて省略する。表記もわかりやすく改変することができる。

- ・虫のこはるに 用 | 叶へたき
- ・ひきずる牛の 塩 | こぼれつつ

・我が月出でよ 身は | おぼろなる

5 - 2

・ひたといひ出す お袋の | 事

・堪忍ならぬ 七夕の | 照り

・四十は老の うつくしき | 際^{きは}

3 - 4

・中にもせいの 高き | 山伏

・いまや別れの 刀 | さし出す

・かすみうごかぬ 昼の | ねむたさ

4 - 3 にあたるものはみあたらない。

きれめのない結句としては、つぎのようなものがそれにあたるとしていいだろう。

・星さへ見えず 二十八日

・けふはけんかく 寂しかりけり

・年貢すんだと ほめられにけり

きれめがニヶ所以上ある句も、うえのきりかたにひきよせることができる。

・漸くはれて 富士 | みゆる | 寺 (2 - 5、あるいは5 - 2)

・里見えそめて 午の | 貝 | ふく (3 - 4、あるいは5 - 2)

こうあつかうと6 - 1のようにきれる例がでてきてしまうことがあるが、つぎの句ではそれは不自然で、3 - 4調とみるべきだろう。

・まじまじ人を みる | 馬の | 子 (3 - 4、あるいは6 - 1)

この類のなかにも4 - 3というきりかたはあらわれない。

単語と単語のきれめでなくて、語構成や語形づくりのなかにみられるきれめも、うえに準じる。ここにも4 - 3調はみられない。

・雨のやどりの 無常 | 迅速

・又だのみして 美濃 | だより | きく

・真昼の馬の ねぶた | がほ | 也

・ふゆまつ納豆 たたく | なる | べし

定型外のものもあつたのであけておく。「とばかり」からが結句だとすると4 - 4になり、当然例外的になる。

・蝶はむぐらに とばかり鼻かむ

3 - 4の結句をもうすこし点検してみる。つぎのように名詞をならべるとき、4 - 3でなく3 - 4になっている。並立名詞句なので、意味的にはあまり問題なしに、それぞれ「たんぼぼ董」「しぐれと雨と」と4 - 3にもなりうる。

・余のくさなしに 董 | たんぼぼ

・それ世は泪 雨と | しぐれと

動詞の終止形でおわる結句も3 - 4にする。これらも、連句のつながりを別にすれば、「あばたといへばいやがる小僧」以下、3 - 4にもできるだろう。

・あばたといへば 小僧 | いやがる

・帰るけしきか 燕 | ざはつく

・春雨袖に 御哥 | いただく

・男まじりに 蓬 | そろゆる

連体 - 名詞のときは動詞のほうを3拍にして、やはり3 - 4にする。これも連体形を終止形にもどし、上例に準じて「輪炭のちりを春風はらふ」のように4 - 3にそろえることもできそうだ。

- ・ 輪炭のちりを はらふ | 春風
- ・ ねられぬ夢を 責る | むら雨
- ・ づぶと降られて 過る | むら雨
- ・ 餅を食ひつつ いはふ | 君が代

なお、『芭蕉七部集』からは、「燈籠ふたつになさけくらぶる」「静御前に舞をすすむる」や、「うたれて蝶の夢はさめぬる」「わが手に脈を大事がらるる」のように、二段活用タイプの動詞や動詞の諸形式から、なお一段化してはいない、旧連体形からの終止形がとりだされる。うえにあげた短句も、「むら雨責る」「むら雨過る」というひっくりかえしはなりたつたはずである。

また、動詞につきあう名詞のかたちも、対格、主格のマークのついた、うえの「舞をすすむる」や「鉢いひならふ声の出かぬる」とともに、マークなしの「なさけくらぶる」「口すすぐべき清水ながるる」もみられる。連体形と本来共起していた「の」格形のほかに、「清水ながるる」のような名格形がみられるのは、「ながるる」が外形 = 表現面では連体形であっても、内容面では終止形のメンバーにくわっていたことのあらわれといえる。こうして、名詞のがわからなくても、「君が代いはふ」のほかに「むら雨責る」「むら雨過る」がなりたつであろう。

このようにみえてくると、1 - 6調は別として、4 - 3調がかけているのは、相当自覚的に4 - 3となるのをさけているのではないかとおもえてくる。蕉風連句全体をみわたしてもこういえるかどうかを検討する必要があるが、4 - 3のきりかたが、3 - 4調と対等にもちいられていたといえないことはたしかである。

連句に結句の4 - 3調をさける傾向があるとしても、それは和歌にまではさかのぼらないはずである。和歌だと「うかりけるひとをはつせのやまおろし はげしかれとは いのらぬ | ものを」とか、万葉調になって、時代的な制約があるかもしれないが、人称代名詞を後置した「...す | われは」のようなおさめかたがあって、4 - 3調が積極的にさけられているとはいえない。そのせいか、語構成的な区ぎりにも「たなし | をぶね」のような4 - 3調がでてくる。和歌をうける点では連句より直接的な連歌ではどうなのか、式目の条々はこの種のことに関してなにかいいおよぼしていないのかがしりたい。

小論の筆者は以前某誌に現代の連歌（連句でなく）の実作をまとめた一冊の新刊紹介をもとめられたことがある。そのとき、オのあるつけあいのめだつ、おもしろい箇所があるとは感じたのだが、いまとりあげている4 - 3のつくりが気になって、それにふれないで紹介することができそうもないので、こわったことがある。連歌での4 - 3の結句の禁などが無いのならとりあげてもよかったのだが。

『歌仙の愉しみ』にもどって、最初にあげたもの以外の4 - 3ときれる例を順にあげておく。前後の長句は割愛する。

- ・ 川の名前の ゆかりを | 語る
- ・ 見おるす畑に 耕牛 | ひとつ
- ・ まづ寝めさせる 自慢の | ライカ
- ・ けふもけはしい 山肌 | よじる
- ・ 謙信実は 男に | あらず
- ・ 踊り抜け出て バイクを | ぶかす

以上はふつうの4 - 3調のきれである。

- ・客閑静の 高原 | 列車
- ・聞けば浪速の 飛脚屋 | 主人

これらは語構成内のきれめである。

4 - 3調ではないが、字あまりの4 - 4調がすくなくないことにも、うえにあげた4 - 3調につながるものがあるように見える。単語 - 単語、語構成内のきれめのようなきれめの質的なちがいでわかることはしないであげておく。

- ・江戸救うたは 海舟 | 南洲
- ・色即是空 空こそ | 色なれ
- ・座右の銘は 一汁 | 一菜
- ・銭ためて買ふ 新型 | 携帯

つぎの短句の結句はきれめがふたつでて2 - 2 - 3だが4 - 3調とはしなくてもいいだろう。

- ・声みな揃ふ 昼 | 遠 | かはづ

短句7 - 7の後句の4 - 3というきれかたを連句のなかにおくと、どことなくすわりがよくないように小論の筆者などには感じられるのは、7 - 7の後句の部分を4 - 3とみるくみたてをかかえこむ、連句以外の有力な短詩型があるからである。それはどどいつほかの近世歌謡にみられる7 - 7 - 7 - 5調の第二句である。どどいつのつくりかたをなにかでよんだことがあったが、そこに、7 - 7 - 7 - 5という7音・5音にもとづいたきりかたでは、どどいつの作詞法にはまだ不十分で、3 - 4 - 4 - 3...のように(たかい | やまから たにそこ | みれば、はなが | さいたと みやこの | たより、おまえ | ひとりか つれしゅは | ないか、いたこ | でじまの まこもの | なかに、など)さらに下位の分割をみなくてはならないといったことがとかれていたようにおもう。だとすれば連句の短句の結句の4 - 3調は、近世歌謡調のきりかたとかさなっている。

『歌仙の愉しみ』の短句をそこだけとりあげると、たとえば、「あいそ | づかしを さらりと | かわし」などは、内容の情調もさることながら、さらに、表現面の4 - 3調によっても近世歌謡調がつよめられているといわざるをえない。

これが、現代連句は音数律のワクをひろげることによって、近世歌謡調をもとりこんだ、と肯定的にとらえていいことかどうかは、じっさいに連句をつくっているひとたちがきめるべきことであろう。『歌仙の愉しみ』はそのことに関して、しつてかしらずか問題提起をこころみているようにも感じられるのである。

引用文献

- ・大岡信・岡野弘彦・丸谷オ一2008『歌仙の愉しみ』岩波新書
- ・中村俊定校注1966『芭蕉七部集』岩波文庫(1979年13刷)

(つけたり)芭蕉七部集連句の7 - 7の結句に4 - 3調がないことは、私事になるが、小論の筆者のむすめ松本圭が早稲田大学1年のときの2003年、雲英末雄先生の演習レポートとして提出している。どのようにかいたかはさだかでないので、今回あらためて小論の筆者が七部集を点検して筆者のかんがえで分類した。なお、雲英先生は昨年(2008年)急逝された。ご冥福をいのりたい。(松本 泰丈)